

# パーソナリティ・アセスメントにおける 防衛機制の再検討

中京大学心理学部 神谷 栄治<sup>注1</sup>

Reconsideration of defense mechanism in personality assessment

KAMIYA, Eiji (School of Psychology, Chukyo University)

The purpose of this paper is to reconsider of defense mechanism in the viewpoint of personality assessment. First, we review the outline of defense mechanism concept in psychoanalytic personality organization. Secondly, we consider a cluster of avoidance and escape related defense mechanism. Thirdly, we consider a cluster of displacement related defense. Fourthly, we consider a cluster of reversal related defense. Fifthly, we consider a cluster of introjections related defense. Finally, we consider regression related defense. The point about defense mechanism is that the usage of defense mechanism makes our personality style and its developmental level.

**Key words:** Defense mechanism, Personality assessment, Personality style

## 1 防衛機制概念の位置づけ

防衛機制とは、耐え難い不安、罪悪感、恥など不快な感情を引き起こすような欲動や観念、感情や記憶などを意識から追いやる無意識化する心的操作である。こうした心的操作もまた無意識裏になされる。

防衛機制を理解するうえでの前提をいくつかあげておきたい。

まず、防衛が働いている場合すべてが病理的であるとは限らない。「あの人は防衛的だ」という場合、通常は否定的意味が込められている。しかし防衛のなかには、パーソナリティの発達を促進するもの、社会生活をいとなむうえで役立つ適応的なものが多数含まれている。たとえば、後述する、取り入れや同一化そして昇華などがその一例である。比較的健常なパーソナリティ構造を持つ人に比べると、精神病的パーソナリティ構造を持つ人の場合、適応に役立つ防衛の適度な使用がなされていないために、通常は無意識や前意識にとどまっていることが意識化されすぎてかえって混乱を招きやすい。こうした場合は、適切な防衛が機能不全であるということであり、防衛過程すべてが病理的であるわけではないのである。

つぎにこれに関連して、防衛のなかには、未成熟

な防衛とより成熟した防衛がある。未成熟な防衛は、原始的防衛と呼ばれることが多く、こうした相対的に低次の防衛は、乳幼児期、特に言語を活用できる前の、前言語期に起源があると想定される。一方、相対的に成熟した高次の防衛機制は、言語を用いるようになってから、また対象恒常性が持てるようになってから活用できるような防衛である。さらにまた低次の防衛機制は、おもに、個人の体験や感情全体にかかわるものが多く、高次の防衛機制は、体験の一部や感情の一部のみを変換するにとどまることが多い。また低次の防衛は、外界を歪曲して認識することにつながったり、外界の他者に影響をおよぼすことにつながるなど、外界と、自己とのあいだで機能していることが多いが、高次の防衛機制は、自己の内界の中での処理を指すことが多い。そして当然のことであるが、低次の防衛機制は適応を妨げることが多く、高次の防衛機制は柔軟に用いられるならば適応に役立つことにつながるものが多い。

第3に、個人がどのような防衛を用いるかは、さまざまな要因による。たとえば乳幼児のなかには、何らかのフラストレーション状況に対して、感情をむき出しにし行動で示す傾向のある子もいれば、感情を外に表現せずにだまりこんでしまったりひいては眠りこんでしまう子もいる。前者は行動化という防衛の、後者は引きこもりのという防衛の原型と考えられる。個人がどのような防衛を主に選ぶのかは、

注1 ekamiya@lets.chukyo-u.ac.jp

もともとの気質や、その後のしつけなどの学習や、身近な人の観察学習、そしてその時に直面している体験の性質などによる。

第4に、個人が主にどのような防衛機制を用いるかによって、その人のパーソナリティの水準や類型が決まつてくるということである。たとえば、フラストレーション状況で、低次の防衛を使うことが多いならば、その人は、ボーダーライン水準や精神病的水準である可能性が高いということとなる。類型に関していえば、置き換えや知性化といった防衛機制に頼りがちな場合、強迫性パーソナリティと考えられるし、理想化や価値下げという防衛機制を用いがちな人は自己愛性パーソナリティと考えられる。

第5に、低次の防衛機制を使うからといって必ずしもその人がパーソナリティ障害などであるといえるわけではなく、また逆に高次とされる防衛機制を使うからといってその人のパーソナリティ構造が健常であるとも限らないということも指摘できる。たとえば知性化という防衛は、一般に高次とされる防衛である。しかし、精神病水準の人が、知性化を用いるということはときどき見られる。また、過酷な体験に直面すると、どんなにパーソナリティが成熟した人でも、低次の防衛機制を一時的に用いることはあり得ることである。一般的傾向としていえるのは次の点であろう。成熟し安定したパーソナリティの人は、基本的には、さまざまな防衛機制のバリエーション中から状況に応じて選んで活用することができ、たとえ一時的に低次の防衛機制を用いたとしても、それを反復的に用いたりはしない。一方、パーソナリティの組織化が相対的に病理的な人や未熟な人は、活用できる防衛機制が限られている。たとえば、たとえ幼少期には有効であったとしても、もはや成人となっては不適切である防衛を常的にくり返して用いていたりするなどである。パーソナリティの組織化の高さを示すのは、低次の防衛機制を使わないことではなく、使用できる防衛機制のバリエーションがあり低次の防衛機制にくわえて柔軟に高次の防衛機制を状況に応じて使えるということである。

## 2 防衛機制の種類

防衛機制はさまざまな種類があり、研究者によって、取りあげる防衛の種類の数もさまざまである(Blackman, J. S. (2004), Fenichel, O. (1945), Freud, (1946), Laughlin, H. P. (1970), Mc-

Williams. N. (1994), 小此木・馬場 (1989))。実際には、防衛機制は、非常に複雑で多様であり、明確に分節して分類整理することは不可能であり、無理にそうした場合は、実際の心的機能の在り方を単純化して歪曲することになる。しかし、防衛機制において、一連の関連する群あるいはスペクトラム(連続体)を想定することもできるので、ここでは、4つの群(スペクトラム)に整理して、パーソナリティを理解するうえで重要な防衛だけを選んでとりあげることにする。

### (1) 回避・逃避を基礎とする一連の防衛機制

人は誰でも、危険な場面や不快なことを避けて通ろうとしたり、そうした状況からなるべく早く逃れようとする。たとえば、行動や知覚の側面では、危ないことが予測される場所から足が遠のいたり、嫌なことから顔をそむけたりし、認識の側面では嫌なことをなるべく気づかないようにし、なるべく早く忘れようとする。こうした行動・知覚面から認知面にわたる回避や逃避が、本人に意識されずに、無意識的に自動的に営まれるのが、これから述べる回避や逃避を基礎とする防衛機制である。

#### ①抑圧と否認

抑圧とは、わかりやすくいうと「動機づけられた忘却」ということができる。DSMによると、「個人が、混乱を招くような願望、思考または経験を、意識の中から、排することによって、情緒的葛藤や内的・外的ストレス因子に対処すること。そのストレス因子の感情の成分は、関連する観念とは切り離されているものの、意識の中にとどまっている」とされている。よって抑圧された願望や観念などは、力を持ち続け、関連する観念などをを通して、また意識にのぼろうとすることになる。一方、否認は「他の人に明白と思われる外的現実または主観的体験の苦痛な側面を認めることを拒否することによって、情緒的葛藤や内的・外的ストレス因子に対処する」(DSM)ことである。実は、抑圧という防衛機制と、否認という防衛機制は、実際には区別することが難しいことが多いけれども、先ほどの抑圧に関する説明の後半部分「感情の成分は、関連する観念とは切り離されているものの、意識の中にとどまっている」という点が抑圧にはあり否認にはないということが大きな違いである。ようするに、否認では「そんなことは存在していなかった」ことにできているので

ある。また、否認は、抑圧に比べると内的なことよりも、「外的現実」や「体験」に対して適用されることが多いことも加えられる。

抑圧のもっとも根本的な例は、次のようなものである。つまり、異性の親をひとりじめし、同性の親を排除したいという願望を意識から遠のけ、意識的には同性の親とよい関係を保ち見習うこととするというような例である。抑圧されるのは、「異性の親を独占し同性の親を排除する」願望である。精神分析では、こうした幼児期の願望の抑圧の段階を経ることで、発達的に重要な同一化や、家庭外への社会へ関心を向けることが促されると考えている。

実際のところ、抑圧の中には、上記のような人の発達にとって本質的な役割を果たすものがある一方で、日常的にもひんぱんに機能していて、比較的、他愛のないものもある。たとえば、面倒なので出たくないとおもっていた会議の予定をすっかり忘れてすっぽかしてしまうというような、まさに単純な動機づけられた忘却といえるものである。この例を使って抑圧と否認についていふと、会議の予定があったことを事後に本人が気づいてその本人が「しまった」と思うような感情成分がのこっていた場合は、抑圧が働いているということになる。一方、あきらかに本人が予定を聞いていたのにもかかわらず「そんな話はありましたか。私は聞いていません」とまったく動じずに言う場合は、認めたくない現実をなかつたことにして閉め出しているので、否認によるということになる。当然、否認という防衛機制の方が、ある現実や観念などをなかったことにしてしまうのであるため、臨床的には扱いが難しい。

抑圧は、いろいろな防衛機制の基本となる機制であるといえる。高次の防衛機制は、多くは受け入れがたい感情の一部を抑圧して残りの部分を加工する処理をしている。

否認と抑圧を多用するパーソナリティは、ヒステリー性パーソナリティである。ヒステリー性パーソナリティの人々は、外界や他者の敵意や否定的感情を否認し、自己の他者への不信感や怒りなど否定的感情を抑圧している。そしてこれらの機制に加えて、否定的な感情について反動形成をおこなったり、他者の肯定的部分を美化したり、かわいらしさを誇張するのである。一方、否認という防衛機制を多用する典型的パーソナリティは、躁的パーソナリティである。躁的パーソナリティの人々は、明らかな肉体的・能力的限界や経済的リスクを文字通り認めないので、

無謀な計画を立て実行したりする。また、アルコール嗜癖など物質依存・嗜癖の人々も、否認という防衛におおいに頼っている。つまり、物質依存によって、生活が破綻して社会的地位や仕事を失っているのだということについて、またさらに物質常用で健康が失われ自らの生存がおびやかされていることについて否認が働いている。また、多くの精神病性障害に関しても、現実検討が失われ、主観的現実が優先し、外的現実への病的否認がはたらいている。否認という機制は、日常的なものから、精神病的なものまで非常に幅広く働いている。

## ②隔離

隔離は、認めがたい体験や記憶について、感情の部分をひきはなして抑えこみ、観念や認知としては受け入れることである。抑圧が体験全体を抑え込んでしまうのに対し、隔離では、体験に対して、観念としては受け入れていて、感情の部分だけを抑圧していることができる。隔離は、感情や衝動と距離をおき、冷静に事実として認知的に処理する態度であるので、適応に役立つ機制である。この機制によって、さまざまな体験をうけいれ、合理的に考え、対応して処理できる。しかし、一方この機制を硬直的に多用している場合、たとえばごくありふれた日常的な体験で、抑え込むまでもないような不安や懸念やいらだちといった感情までも隔離して、認知的観念的に処理しがちとなると、その人の感情領域がせばまってしまうので、人間味が押さえられてしまい問題となる。隔離を、中心的に用いるのは、強迫性パーソナリティである。強迫性パーソナリティでは、衝動や感情を隔離しており、抑え込まれた衝動や感情やこれから生じてくる不安などに対して、さらに打ち消し、知性化、反動形成などをつかい対処している。

## ③否定と誇張

否定は、抑圧されていた欲動や感情や観念などを意識化または言語化しながら、その内容を否定したり、否定的な形で話題にすることである。これは、失敗してしまった抑圧を遅ればせながら回復せたり、付け加える継起的な過程である。たとえばある患者が「この夢の中の人物が母であるなんてことはありません」と語った場合、これは実際には「私には母に思えましたがこの思いつきを認めるわけにいきません」という意味になる。日常的にも、批判的

なことを言った後で「これはけっして文句をつけているわけではないんですよ」などというといった形でこれに似た機制は用いられている。

誇張は、抑圧されていたものを意識化していくながら、他方でその意識内容を否定する考え方や抑圧の原因となっていた感情を誇張する機制である。たとえば「私は自分の子どもが嫌いなんです。なんて異常にとんでもない母親なんでしょう」といった場合や「異性に性的な空想や願望をすぐに抱いてしまうんです。なんていやらしい、ふしだらなことでしょう」といった場合である。これは、攻撃性や性的欲動をいったんは認識しつつも、同時にこれを否定する考え方を強調しているわけである。否定は、抑圧されていたものの表出を単純に否定するだけであるが、誇張は抑圧されていたものの表出への否定に修飾を付け加え、抑圧の動因である感情をおおげさに示すのである。誇張は、ヒステリー性パーソナリティ、中でも自己顕示性が目立つ群で使われることが多い。

## (2) 置き換えを基礎とする防衛

### 置き換え

置き換えは、ある対象に対する怒りや恐怖といった欲動や感情を他の対象に置き換えることである。置き換えは、これまで述べた抑圧や否認そして隔離ともちがって、感情と欲動の性質そのものは抑え込まれておらず意識にのぼっていたり行動にうつされたりするが、ただその表出の向かう対象だけが移動している点が特色である。

置き換えも、非常に日常的に見られる機制で、たとえば職場でささいなことで上司に注意されむしゃくしゃしている人が、プロ野球を観戦して相手チームにヤジを飛ばして怒りをぶつけるといったことである。この例のように、怒りの対象が置き換えられることが多いが、性的快感の対象が置き換えられたり（フェティシズム）、恐怖や不安の対象が置き換えられる（恐怖症）こともある。

### 知性化

知性化は、欲動や感情を直接そのままの形で意識的に感じたり表出したり行動に移す代わりに、論理的思考過程や知識の獲得や伝達、客観的観察や認識に置き換える機制である。たとえば、学校になじめずにいる高校生が、直接こうした不満や不安を感じるのではなく、日本の教育制度の問題などを分析し批判することに情熱をそそぐといった場合があげら

れる。知性化は、先にのべた隔離という機制を前提としていて、特定の欲動や感情を充足したり解放したりすることを抑制している。しかし、單なる隔離と違い、知性化には、そうした欲動や感情が認知的過程に置き換えられ、代理満足されている面がある。さきほどの例でいえば、知識の披瀝や鋭い批判は、競争心や攻撃性を満たすことにつながる。知性化は、社会適応性の高い代理的満足、つまり昇華の意味を持つことが多い。特に知識や合理性を肯定的に評価するような現代社会ではそうである。そのため、この機制の使用が、知的であると過大評価され、病理的な面が見逃されるおそれもある。知性化は、認知的能力の発達を前提としているので、発達的には高次の防衛機制とされるが、あまりに現実からかけはなれていたり、硬直的であったりすると、病理的であるといえ、こうした病態は、精神病水準の障害で見られる。一般に、知性化を使いことが多いのは、強迫性パーソナリティの人である。

### 合理化と道徳化

合理化は、自分のとった行動や態度に対して、合理的な理論付けや認知的な説明づけをすることである。子どもをなぐっている親が、「子どものためを思ってあえて厳しくしているのです」という場合である。さらに、道徳化は、こうした説明を、倫理的あるいは社会的義務に位置づけてすることである。たとえば大学院生の論文審査において執拗なまでに批判する教授が「学問の世界で、温情を見せてどうするんですか？私は当然の学問的指導をしているだけです」という場合である。

合理化も精神病領域から健常な領域の思考過程まであらゆる領域で見られる機制である。ほとんどの行為や態度には何らかの説明をつけようと思えばつけられるからである。知性化と合理化は、認知的過程を必要とする面で似ているように思われるが、重要な相違点がある。それは、知性化では感情は、まず隔離されいったん抑えられるが知性化過程で置き換えて代理満足される。一方、合理化では、感情や欲動は抑え込まれずにまず解放され発散され、その後に感情や欲動の発散を正当化するために認知的過程が動員され、代理満足の要素がないからである。また、知性化の場合は、正常な現実認識を前提としているが、合理化は自分の行動や態度などの現実を、自分の欲動や感情に合致するように正当化し、そのさいには都合の悪い点への否認や歪曲など

現実の否認が伴うからである。

### 昇華

昇華は、欲動や対象や充足方法を、社会的に適応性が高いあるいは価値の高いものに置き換えることであり、置き換えた適応性の高いものである。たとえば、検察官は攻撃性を社会的正義や法律の枠のなかで昇華しているといえるかもしれない。昇華は、欲動の即時的、直接的充足を、間接的なものに置き換え、社会に適応した形で代理満足がなされることになるので、欲動を抑えるための心的エネルギーを費やすずに済み、満足が得られ、社会的にも役立つ点で、適応的な機制である。昇華の機制は、その人の気質や主な欲動の特性や社会生活的文脈全体をとらえて初めて、この機制の存在を類推することができる。

### (3) 逆転を基礎とする機制

#### 逆転

逆転は、意識すると不快や不安をまねく感情や欲動の方向性や内容を無意識のうちに反対の向きあるいは対照的な内容のものに反転させることである。したがって、逆転には2つのことになった要素があり、1つは、立場の逆転で、自分の立場を、客体から主体へ、あるいは主体から客体へと入れ替えることである。もう1つは、内容の逆転で、たとえば、愛情を嫌悪へあるいは甘えを自立へといったような、感じている感情や欲動の質を対照的なものへ転じることである。

1つめの例をあげると、「私は彼のことを好きだ」という自分の感情を認めないで、「彼が、私のことを好きなのだ」と感情はそのままに立場や感情の向かう向きを反転させることができられる。2つめの例は「私は彼のことを好きだ」と認める代わりに「私は彼のことが嫌いだ」と意識する場合である。この逆転は、続いて述べる、反動形成、自己自身への向け変え、投影、打ち消しの基礎となる機制である。

#### 反動形成

反動形成は、自我にとって受け入れがたい欲動や感情を意識化するのを防ぐために、その対照的な感情や欲動を強調する機制である。たとえば妹が生まれ、家庭での主役の立場が奪われた幼児が、本当は妹を憎んでいるのに、過剰にかわいがるといった例

がある。反動形成はこのように、元の欲動や感情をそのまま表出すると不適応になるために、これらの不適応あるいは非社会的である欲動や感情を適応的なものあるいは社会や家族が認める対極の感情や欲動に逆転し、適応性を高めることにつながる機制である。したがって、幼少期などではこうした機制を通じて、超自我の形成につながっていくために、パーソナリティの成長に寄与する機制である。

反動形成の場合は、表出されている表面的態度は、人々の感情や欲動によるわけではないので、傍目からは、どことなくわざとらしかったり、大げさに感じられることになりやすい。内心では尊大な人の慙愧無礼さがその例である。反動形成は、先述した「逆転」の感情や欲動の内容の対照的なものへ転じる場合の、より分化したものである。反動形成は、社会的に望ましいものへ転換であるが、逆転はかならずしそうでなく、また反動形成の場合抑え込まれた感情や欲動が影響を及ぼしていて葛藤を生じさせるが、逆転は葛藤せずに対極的因素のみを感じる。この点は、逆転と反動形成の関係は、否認と抑圧の関係と似ている。また、逆転はどんな感情や欲動に対してもなされるが、反動形成の場合は、より分化して、特定の欲動や感情に対して機能する面もある。

反動形成と関連しているのは、強迫性パーソナリティとヒステリー性パーソナリティである。強迫性は、攻撃性や汚したい欲動が、良心的で潔癖という形に反動形成され、ヒステリー性では、攻撃性や自己主張性が、過度のかわいらしいものの強調といった形に表れている場合がある。

#### 打ち消し

打ち消しは、先ほど述べた「逆転」に関連する一連の機制の1つである。打ち消しは、過去の思考・行為に伴う罪悪感や恥などの否定的感情を、それとは反対の思考や行為によって打ち消そうとする機制である点である。当然、無意識的にこうした行為はなされている。打ち消しは、反動形成が、時間的繰りに沿って展開される機制ともいえる。それは無意識的な償いであり、反動形成と異なるのは、打ち消しの場合はある個別的な行動や感情の喚起に対する具体的な機制である。たとえば、相手に批判的な言動をとったあとに賞賛をする、あるいは浮気をした夫が、妻に花を贈るといったことなどである。この打ち消しが症状となっているのは、強迫性障害、特に、強迫行為を主症状とする人たちである。洗浄強

迫のある人は、何か汚い菌などに汚染された恐怖を、手洗いという打ち消しで消そうとしてそれが強迫化してしまっている。

### 投影

投影とは、意識では受け入れがたい欲動や感情を自己に所属するものとして認めることを避けて、こうした欲動や感情を外界や他者に所属するもの認識することである。その結果、投影を向けられた外界や他者は、自分には受け入れがたく感じられたり、自分に不快な感情や態度を向けてくると認識されることになる。たとえば、学校や学級に対してなじめず怒りを感じている児童が、学校を恐れ、級友から意地悪をされていると恐れるような場合である。このように投影は、自分の内面の一部を外に帰属させ外界を主観的に色づける機制なので、外界を歪曲してしまい、不適応につながりやすい。この機制によって、自分の内的な欲動や感情やこれにかんする罪悪感などを自覚せずにすむ。先ほどの例でいえば、自分の攻撃性に向き合わずに、あくまでも被害的な立場でいられることになる。

後述する取り入れが、外界の性質を自己に取り込む（呑み込む）ことであるのに対し、投影は、対照的に自己になじまないものを吐き出す機制である。取り入れは自己への同化を、投影は自己からの異化をうながし、両者が相まって他者からの自己の分化統合がなされていく。投影には、原始的で未熟な投影と、成熟した投影がある。原始的な投影では、前に述べたスプリッティングと関係し、スプリットされた激しい質の感情や欲動が投影され、外界や他者の実際との照合の現実検討が低下しがちとなる。一方、成熟した投影ではいったん抑圧をへて、極端な性質でない穏やかなものが投影され、自他の感情の区別の現実検討はある程度保たれている。

投影という機制は、はばひろく一般に見られるが、この機制を多用しているのは、パラノイア・パーソナリティの人である。パラノイア・パーソナリティの人は、自己の愛情を逆転させて投影し「自分が好きなのでなく相手が自分に好意をむけてくる」としたり、また自分の中の敵意やねたみなどの攻撃性を他者に投影して、被害念慮的な認識を形作る。

### 自己への向き換え

自己への向け換えは、外的な対象に向けられていた欲動や感情を自己自身へ向け換える機制である。

この機制も欲動や感情を他者から自己へ向きを反転させるので逆転に関連する機制である。たとえば、気まぐれな親や恵まれない環境に対して怒りを抱く代わりに、こうした怒りを自分が「いい子」でないのでこうした目にあうのだと自己批判している場合に、こうした機制を推測することができる。こうした機制が見られるのは、抑うつ的パーソナリティやマゾヒスティック・パーソナリティの人である。こうした人々は、外界や他者に怒りを表出することを避け、自分を責めるほうに攻撃性を向ける。「すまない」「もうしわけない」「自分はだめだ」などという言動にあらわれる。

### (4) 取り入れを基礎とする防衛

#### 取り入れと同一化

取り入れは外的対象の属性や機能を自己に取り込んで（呑み込んで）しまうことである。そしてその対象を自分のうちに保持し、主観的にはその対象と自己とが未分化になっている。一方、同一化は、ある人があたかも別の人物になったかのような気持ちになって感じたり行動したりする機制である。どちらも、ある対象の機能や態度を、自分に取り込む点は共通しているが、違いは、その取り込みにおいて、自他の区別が未分化な段階でなされているのが取り入れであり、自他の区別がついているうえで、相手の属性などを取り込むのが同一化である。

取り入れも同一化も、外的な対象の属性などを獲得するわけであり、人のパーソナリティの発達形成に欠かせない心的機制である。アイデンティティ形成は、様々な同一化の取捨選択の過程であるといえる。

同一化には上記のような、パーソナリティの成長に必須な機制であるが、一方、葛藤解決に防衛的に活用されることもある。たとえば、「攻撃者への同一化」はよく知られているが、これは、虐待を受けた子どもが、攻撃者の特徴を取り込んで、自分が攻撃する方にまわって振る舞う現象をさすが、このことによって恐怖心や自己の無力感を回避することができる。また、こうした機制は、虐待者やサディズム傾向において見られる。

また、「失った対象への同一化」もよく見られる。これは、死別や離別した対象のある特徴や属性に同一化することで、このことによって、重要な対象の不在という現実や喪失感を否認することになる。この場合、自他の区別が失われがちで取り入れに近い

ものとなることもある。こうした機制は、抑うつ的パーソナリティに見られる。

#### (5) 退行の機制

退行という現象は、生物進化学的・神経学的な面からも説明され、さらに、単に防衛としてだけではなく病態の状態像として、病理的退行や健康な退行、創造的な退行などさまざまな側面がある。ここでは、防衛としての退行の機制について述べる。

退行とは、すでに発達して、機能分化していた状態にいったん達していたのに、何らかの困難や葛藤、不安に遭遇して、発達的により以前の未発達な状態に逆戻りすることを言う。たとえば、しばしば見られるのは、幼児において、妹か弟が生まれ、養育者がその赤ん坊の世話をすることが増えると、急にできていたことができなくなったり赤ん坊じみた態度を見せるようになる例や、青年期に入り、他者と競い合いつつ何らかの達成を目指す発達段階に入った人が、敗北や挫折に出会い、依存的関係の世界に逆戻りしてしまうような例である。こうした退行が、状況的で、一時的なものに過ぎず回復可能なものであるか、それとも恒常的な状態と化して、弾力性を失っているかどうかで、比較的健康なものであるか病理的なものであるかが違ってくる。退行に、柔軟性があり、退行からの回復に創造性がともなっているほど、より健常であるといえる。逆にいうと、常に現実検討や損得を最優先し遊びがないような退行を許容しない態度はむしろ問題であるといえる。パーソナリティの各類型は、こうした退行的態度のあるパターンの恒常化ということができる。たとえば、強迫性パーソナリティの人は、完全主義で潔癖で貯めるという強迫的スタイルへの退行が常態化していると言える。この典型的でわかりやすい例は、DSMの境界性パーソナリティ障害や依存性パーソナリティ障害であろう。退行は、パーソナリティを形作るほどでなくても、日常的にミクロな様態で機能しているので、そうした動きをとらえて、そこに柔軟性や回復性などを観察する必要がある。

#### 文献

- Blackman, J. S. 2004 101 Defenses – How the Mind Shields Itself. New York: Brunner-Routledge  
Fenichel, O. 1945 The psychoanalytic theory of neurosis. New York: Norton  
Freud, A. 1946 The ego and the Mechanisms of defense. New York: International University Press

(A. フロイト 自我と防衛機制 岩崎学術出版社 1982)

Laughlin, H. P. 1970 The ego and its defenses. New York: Jason Aronson

McWilliams. N. 1994 Psychoanalytic diagnosis. New York: Guilford Press (ナンシー・マックウィリアムズ パーソナリティ障害の診断と治療 創元社 2005)

小此木啓吾・馬場禮子 1989 新版 精神力動論 金子書房

(受理年月日 2006年10月15日)